27 一郎さんたちは、「徒然草」の二つの章段を読み比べ、兼好法師の友人観について話し合っています。次の古文【A】・【B】と【話し合いの一部】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【A】

友とするにわろき者、七つあり。一つには、高くやんごとなき人。（身分が高くて尊い）二つには、若き人。三つには、病なく身強き人。（無病で健康な）四つには、酒を好む人。五つには、たけく勇める兵。（強く勇ましい）六つには、虚言する人。（うそをつく）七つには欲ふかき人。

よき友三つあり。一つには物くるる友。（物をくれる）二つには医師。三つには智恵ある友。

（百十七段）

【B】

同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、（本当に気の合った）（しんみりと語り合って）（おもしろい）（ちょっとした世間話）うらなくいひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、（遠慮なく言い合って心を慰めたなら）（いるはずがないから）つゆ違はざらんと向ひゐたらんは、ひとりあるここちやせん。（相手の気持ちに少しも逆らわないように）（一人ぼっちのような）

互いに言はんほどの事をば、「げに」と聞くかひあるものから、いささか違ふ所もあらん人こそ、（言おうとする）（なるほど）（聞く価値のあるものもあれば、（考えが）多少）「我はさやは思ふ」など争ひ憎み、「さるから、さぞ」ともうち語らはば、つれづれ慰まめと思へど、げには、少しかこつかたも、我と等しからざらん人は、大方のよしなしごと言はむほどこそあらめ、まめやかの心の友には、はるかにへだたる所のありぬべきぞ、わびしきや。（自分はそうは思わない）（議論になって）（そうだから）（そうなのだ）（語ることもできれば）（心のさびしさもなぐさむだろう）（本当のところは）（不平にいたるまで）（ぴったりしない）（どうでもよいことを話し合っている間はいいとしても）（真実の）（大きな距離があるものだということは）

（十二段）

【話し合いの一部】

一郎　兼好法師の友人観について、気付いたことを発表してください。

好美　【A】には、兼好法師の友人判定の基準ともいえる内容が書かれています。「わろき者」として、「虚言する人」や「欲ふかき人」を挙げていることはすぐに納得できるのですが、それ以外がなぜよくないのか分かりません。

二郎　そうですね。「若き人」や「病なく身強き人」、「たけく勇める武士」がよくないというのは、不思議に思います。

一郎　【B】には、兼好法師がそう考えるヒントがあるように思います。兼好法師が「よき友」として求めているのは、どんな人でしょうか。

明子　兼好法師にとって、何でも遠慮なく語り合え、心を慰められる「［　a　］」が理想の友であると、【B】には書いています。

好美　確かに、気の合う人と話していたら、楽しくて時間を忘れます。逆に気をつかう相手だと、とても長く感じます。だから、相手の気持ちに逆らわないようにすると、「［　b　］」と書いているのも、分かるように思います。

明子　また、考えが多少食い違っても、「自分はそうは思わない」と遠慮せず言い合えるなら、ともあります。兼好法師は、付きあうのなら自分と価値観が同じで、遠慮なく付きあえる人がよいと考えているのですね。

二郎　そのように考えると、「高くやんごとなき人」には身分の差があるから、遠慮して気をつかうでしょうね。

好美　それに、年を取っていた兼好法師にとって、「若き人」も［　　］から、よいとはいえないでしょうね。

明子　兼好法師はあまり体が丈夫でなかったと資料集にありました。だから、「病なく身強き人」や「たけく勇める武士」とは、話が合わないでしょうし、ペースが違うので疲れるかもしれません。

一郎　では、付きあうのに「よき人」についてはどうでしょう。

二郎　「物くるる友」、「医師」、「智恵ある友」の三つを挙げています。体験から、自分にとって実用性のある人を挙げているように思います。

明子　【A】のこの部分はすごく現実的ですね。理想とする心の友を求めながら得ることができなかったから、そのような書き方をしたのかもしれませんね。

1　――線部「向（むか）ひゐたらん」を、現代仮名づかいに直して、すべてひらがなで書きなさい。

［　　］

2　**【話し合いの一部】**の［　a　］・［　b　］に入る適切な言葉を、**【B】**から、［　a　］は**七字**、［　b　］は**十一字**で、それぞれ抜き出しなさい。

a［　　］

b［　　］

3 **【話し合いの一部】**をもとに、□に入る、兼好法師にとって「若き人」が「友とするにわろき」理由を、「から」に続くように、**十五字以上、二十字以内**で書きなさい。

15

20

から

4 話し合いの後、一郎さんは**【B】**が ═ 線「わびしきや（さびしいことだ）」で終わっていることから、なぜ兼好法師がそのような孤独感をもっているのかを考えました。あなたなら、どのように考えますか。次の**条件1・条件2**に従って書きなさい。

条件1 **【話し合いの一部】**を踏まえて、「兼好法師は、」に続けて書くこと。

条件2 兼好法師が求める理想の友人像と、実際のことに触れて、**六十字以上、八十字以内**で書くこと。

兼好法師は、

60

80

問題について

［知識及び技能　⑶伝統的な言語文化］古文を読み比べる問題（兼好法師の友人観について考える）

古文を読み比べることによって、古典に表れた登場人物や作者のものの見方や考え方をより深く知ることができます。この問題のように同じ作品の別の段だけでなく、同じ時代に書かれた別の作品や、違う時代の同じジャンルの作品など、視点を決めて読むことで、古典の世界がより身近になるでしょう。

○　解答は、問題用紙に記入します。言葉や文章で答える問題は、条件に注意して書くようにしましょう。

○　解答を読んで、自分で答え合わせをすることもできます。文章で書く問題は、解答の例文を参考にしましょう。

解答

27

1　むかいいたらん

2　a　同じ心ならん人　　b　ひとりあるここちやせん

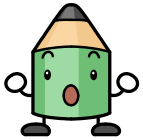
3　（例）年齢差が大きいので考え方や行動が違う

＊　同様の内容が書けていればよい。

＊　「付きあうのなら自分と価値観が同じで、遠慮なく付きあえる人がよい」という内容を踏まえて書いていること。

4　（例）（兼好法師は、）

自分と同じ価値観をもつ真実の心の友を求めている。しかし、そのような友は現実には存在しないので、そのような心の友を求めれば求めるほど、孤独感が深まっている。（七十七字）

＊　同様の内容が書けていればよい。

＊　理想の友人像と、実際のことに触れて、孤独感について説明していること。